

外国語のススメ（教員コラム）

※執筆者の所属・職名は掲載当時のものです。

【第45回】外国語を学ぶきっかけと必要性

法学部准教授 森住 信人（刑法担当）

騙された気がする…。このコラムの執筆は、国際交流の仕事で一緒にさせていただいている寺尾先生に依頼されました。「学生に外国語を勉強したくなるようなことを書いて欲しい」、そんな言い方だったと記憶しています。その際、「軽い気持ちで良いので引き受けてみない？ どう？」と、人の良さそうな笑顔で言われたので、気楽に書けるかなあ、と安易に引き受けてしまいました。

これを書くにあたって過去のコラムを読ませていただきましたが、まず執筆者がほぼ外国語を専門とする先生ばかりで、その内容は実体験を基にした実際に「ためになる」ものである上に、しかも面白いものばかりでした。いやいや、これは安請け合いをしてしまったと後悔しているところです。

さて、私の専門は、法学分野の刑法です。法学部の皆さんにはお馴染みでも、他学部の学生さんには馴染みがないですね？刑法は、犯罪とは何か、刑罰をどうするかを、粘っこく考える学問と把握していただければ、おおよそ間違っていないです。私が刑法を研究したくて大学院への進学を決めた理由は、学部の時に学んだ刑法が面白かったからです。今思えば、これも深く考えるべきであったかと若干反省しています。



ところで、刑法の研究にはドイツ語が必須です。「何い！」というのが、こう聞いたときの私の反応でした。実は、日本の現行刑法はドイツ刑法の影響を強く受けて（というか、ほぼ丸ばくりで）制定されました。明治40年です。その結果、刑法の条文解釈においてもドイツの刑法理論が強く影響しています。これは、刑法理論を過去に遡って考察すると、ドイツ刑法理論に「必ず」行き当たることを意味します。大学院に進学したいと指導教授に相談すると、「ドイツ語はできるよね？」と笑顔で聞かれました。自慢じゃないですが、学生時代を不真面目に過ごしてきた当方としましては、第二外国語の選択基準は「楽勝な科目」でした。先輩に騙されて（ばっかりでしたが）、中国語を選択したので（かなり酷い目に合いました）、ドイツ語なんか知らないですよ。それこそ、アルファベットすら分かりません。刑法を研究する者はドイツ語を習っているのが当然という前提はまさに寝耳に水でした。よく考えてみると、刑法の教科書には所々に英語ではない漢文字が記載されていたのですが、学部の時には「日本の」法律の刑法を学んでいるのですから、そんなことには気づきもしなかったのだですね。これも学問に対する姿勢が未熟だったからに他なりませんが、後悔は先に立ちません。

大学院への進学を決意した以上、私はドイツ語を学ぶしかありませんでした。このコラムを読んでいる学生さん達の多くは外国語あるいはその先にある外国に興味があり、それぞれの外国語の習得を目指していることと思います。ですので、基本的に外国語学習は外国人とのコミュニケーション能力の開発に向けられているものと思われます。それに比べると、私の外国語学習への動機は刑法研究の必要に迫られたものです。やや目標が異なります。ぶっちゃけてしまえば、ドイツ語で書かれた刑法の教科書や論文等が読めれば良いのです。読んで理解できれば、発音に難があってもさしあたり大きな問題ではありません。大学院では諸先生方の心優しい指導により、何となくドイツ語が読めている気分にさせていただきました。誠にありがたいことです。

その後、いろいろな幸運に恵まれて、大学院在学中にドイツに留学する機会を得ました。これが私の初めての海外旅行です。準備期間がほぼなく、とりあえず行ったのですが、ドイツ語で刑法に関する文章を読んできたことは、当たり前ですが、日常生活において何の役にも立ちません。留学の当初は発音が悪いので話しがまるで通じませんし、相手が話していることも理解できません。仕方がないので、しばらくはテキトウな英語と日本語とオーバーなアクションで意思疎通してました。ここで得た教訓は、「大事（緊急）なことは言葉が違ってもおおよそ通じる」ということです。また、準備をしていなかったことは現地の滞在手続き等で諸々の重大な、そして致命的な問題を生じました。これらの問題の解決は事後的には大変に面白い思い出となっています。しかし、これから留学する方には「準備は大事！」とっておきましょう。

留学してから「話しができないと命に関わる」ことに気づき、現地でドイツ語会話の講座を受講してから、なんとなくドイツ語でコミュニケーションがとれるようになりました。この頃、違和感を持ったのは、ドイツ語の勉強をしに留学している日本人学生とも知り合っていたのですが、彼（彼女）らが皆、ドイツに来た理由として、ドイツ語を学びに来たということでした。当時の私は刑法の研究をするために来ていたので、ドイツ語はその前提なのです。生活できないと研究する前に死んじゃいますし。

そこで皆さんに考えて欲しいことは、なぜ外国語を学びたいと思ったのかということです。何のために外国の人々と意思疎通をはかりたいのでしょうか？その目的を（少々不純な動機であれ）明確にしておく、それぞれの外国語を真剣に学べると思います。

（2014.01.27）

「略字符」というものがあります。英語ではapostropheと言い、「略符号」とも訳されます。can not を短縮するときに、nとtの間に書く「'」のことで、母音を省略する際の記号として用いられますね。韻律を整えるための詩の表現とか、あるいは俗語などの場合に、しばしばお目にかかるようです。例えば「ごきげんいかがですか？」をドイツ語では「ヴィー・ゲート・エス？（Wie geht es ?）」と言います。あえて直訳すれば「ヴィー（Wieどのように）/ゲート（geht行く）/エス（esそれは）」で、英語ならば現在進行形で How is it going? と言うのに等しいでしょう。

もちろんエス（es = it）が形式的な主語であるのことは言うまでもなく、従って es のeを省略して短く言う場合が普通で、「ヴィー・ゲーツ？（Wie geht's ?）」となります。会話の入門レベルの練習で、必ず出てくるド基本表現なのですが、実はこの省略記号を省略するドイツ人が非常に多く、そのためかどうか、新正書法では「省略記号は書いても書かなくても良い」というドイツ人らしからざる（？）アバウトな対応になったようです。



そもそも「e」の音は、他の母音に比べても省略されることの多い「あいまい」な音なので、日頃悩まされている「-e」か「-en」が等々の、文法的には重要な語尾変化の区別も、実践的な会話の場合には、実はあまり重要でない場合も多いのです。これが方言になると、さらにすさまじくて、例えばウィーン方言では、不定冠詞の「アイン（ein）」が、わずか一音の「ア（a）」にまで省略されてしまいます。そして時代がさかのぼったりすると、さらにさらに恐ろしいことになります。時代による言葉の変化は、用語上の変化もありますが、実は音韻変化の方が著しくて、その法則性は言語学の基礎を成すほどに重要なテーマとなっています。

外国語の習得に際しても、実は文字よりも「音声」の方が、はるかに重要なのですが、どうしても「文字」にとらわれてしまう学生が多いようです。

言葉を発する際の「音声」を「文字記号」に写し出すのは、もともとが困難な課題です。そのために「発音記号」が一応は存在しますが、仮に「工」の音を「e」と「a」に分けて書いたとしても、もともとがアナログな変化をデジタルな記号に正確に表現するのは、原理的に困難な課題でしょう。むしろ「よく聴く」こと、「聴いた音を真似て繰り返すこと」が重要です。これは記憶を確実にする点からも非常に大事な点です。もちろん視覚情報からの外国語の勉強も大切ですが、言語の土台は「音声」である点に「耳を傾けて」いただきたいと思います。あいまいな「音声」は、四角四面の「規則」よりも、はるかにフレキシブルな世界です。「間違っているけど、通じる！」というような、おおらかな気持ちが外国語学習では大切ではないでしょうか。

(2013.12.05)

「日本の外国語教育って、文法ばっかじゃん？」「もっと実用的なコミュニケーション力を身につけたいのに」——そういう意見を、学生のみなさんからしばしば聞きます。

これは半分当たっていて、半分外れています。確かに、従来型の外国語教育は文法の細部にこだわすぎたかもしれません。けれども、私が授業で実感するのは、「そんなヤワな文法力じゃ、コミュニケーションの〈発信〉も〈受信〉も怪しいぞ」ということなのです。

私の言う文法力とは、〈外国語マメ知識〉の集まりではありません。センテンスを組み立てる力、つまり〈構文力〉のことです。

〈発信〉つまり喋ったり書いたりすることは、構文の力なしではできません。発信の内容が高度になればなるほど、要求される構文力も高くなってゆきます。たとえばビジネスの場では、ちょっとした構文ミスから生まれる誤解が、取り返しのつかない損失を生むことがあります。みなさんが思い描く実用性が外国語で交渉や説得を行なうことであるなら、平易な言葉で誤解の余地のない文を組み立てるだけの構文力は絶対に必要なのです。

そして、ネイティブ・スピーカーでない我々にとって、〈受信〉とくりにリスニングの際には、音を瞬時に文に変換し、文脈を読み取るための構文力が欠かせません。外国語は聞き流すだけで覚えられるなどという甘い誘惑には、うっかり乗らないようにしてください。構文を聞き取る意志と技術がないかぎり、外国語はいくら聞き流しても意味不明の音のままなのです。

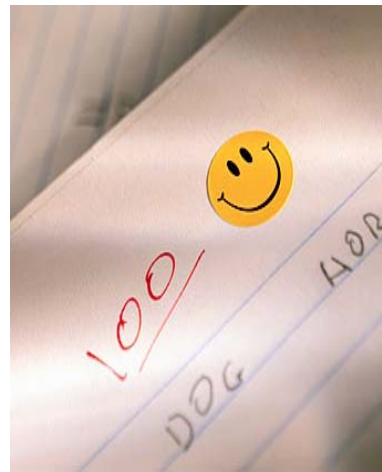
では、構文力はどうすれば身につくのでしょうか？ いちばん効果的なのは、身につけたい外国語の基本センテンス集を手に入れ、丸暗記することです。それも、繰り返し繰り返し声に出して読み上げて、反射的に口から出て来るまで覚えこんでしまうことです。センテンスの数は500もあればいいかな。えっ、そんな面倒だ？ 「実用的なコミュニケーション能力」を身につけたいみなさんが、何をおっしゃいますか！

筋トレの積み重ねなくしてスポーツの試合に勝てないように、普段から〈構文力の筋トレ〉を行なっていなければコミュニケーションの力は身につけません。私は語学教員として、最良の筋トレのプランを提示し、みなさんにそれを実行してもらうためのよりよい指導法を追求してゆきたいとつねづね願っています。ですが、究極のところ、構文力の筋トレを習慣づけられるかどうかはみなさん次第なのです。

自分の構文力がどれくらいか知るには、英語でしたら、さいきん人気のTOEICを受けてみるのもいいでしょう。あれはビジネスマン向けのバリバリ実用英語のテストですが、基礎的な構文の知識を洩れなくマスターしていないと、文章題でもリスニングでもある程度以上の点が取れないようになっています。

もうちょっと自信のある向きは、いま安倍内閣と文部科学省が強力にプッシュしているTOEFLでも構いません。ただ、実のところ、TOEFLはかなり高度な構文力のある人でないと結果に差が出ないテストです。たいていの人は、TOEICでも自分の構文力の低さに過度のショックを受けることができるはず。そこで大事なのは、受けたショックをそのままにしてしまわないことです。どうか、上に述べた構文力の〈筋トレ〉を充分に行ない、もう一度チャレンジしてください。結果はきっと違っているはずです。

(2013.12.05)



【第42回】外国語の書物を読む楽しみ。

ネットワーク情報学部教授 中村 友保（ネットワーク・イングリッシュ担当）

LL研究室室員でなく、ネットワーク情報学部の専門科目「ネットワーク・イングリッシュ」（ICT関連の記事を読解し議論するのが目的）は担当していますが、語学としての外国語科目担当の教員ではない私がLL『語学担当教員コラム』を執筆することになったのは、過日、LL研究室室長の寺尾先生と電車で乗り合わせた際に「中村さん、外国語が好きなようだから、書いてくれる」と依頼されたからです。

高等学校が、当時は第2外国語が選択できた都立江北高校だったおかげで、大学になっても英語よりもドイツ語の書物を読むのが好きでした。RECLAM文庫をいつも持っていた記憶があります。英語も、今の若者たちが熱望する「話せる英語」ではなく、まずは読めることでした。学部1年次の夏休みの時に、英語の宿題は「英語の本を1冊読んでくること」でした。神田の三省堂（当時は木造2階建て）を訪れて、たまたま目についた、B. Russell著"The Conquest of Happiness"を購入しました。どのようなレポートを書いたのかは覚えていませんが、本にあちこちに書き込みをしたのを見ると、哲学的な内容を理解したかどうかは分かりませんが、読み通したようです。また、学部専門科目の電気磁気学なども教科書は日本語ではなく英語の「アジア版」（米国の出版社の許諾の下で日本の出版社が印刷）でした。大学院で学ぶようになったころには、科学の分野で読む必要のあるドイツ語の文献は非常に少なくなり、いつしか英語中心になりました。

学生（生徒も）がある科目を好きになるきっかけは、どのような分野でも担当の先生によるところが大きいと思います。大学時代（学部は電気通信大学でした）、教養英語の先生は八木林太郎先生という方でした。老教授でしたが、学生の名前と顔を覚えることに天才的（？）といっていほどの方で、当時の教養英語の授業は3～4学科（1学科は30人前後だったと思います）が1クラスでしたが、120人ほどの学生の名前を憶えているだけでなく、「同じ姓の学生が3年前にいたけれど、君のお兄さんですか」といった質問を聞いたことは何度もありました。また、卒業後、電車に乗っていたたまたまお目にかかった際にご挨拶したら「あ、中村君、久しぶり」とのお言葉にビックリしました。同じ経験は私だけではなかったはずです。

八木先生が最初の授業で云われたことは「君たちは、高等学校で十分な英語を学んできて入試を通ってきたのだから英語の力は十分あるはずだ。」そして「私の授業を通して理解してほしいことは英米人の心、考え方の根本を形成した2つ、すなわちバイブルとシェークスピアだ」（正確にどのように語られたかは、約半世紀前なので不確かですが）といわれ、授業では「フランクリン自伝」や「ソクラテスの弁明」を使われましたが、文中の多くのところで、それが聖書や、シェークスピアの作品からの引用であること示され、時に英語だけではなく、この文はドイツ語では "Wollte Gott, wir wären in Ägypten gestorben" (Exodus 16:3) である（なぜか、ここだけ覚えていました）といった具合でした。我々学生の多くはむしろシェークスピアの作品からの引用を暗記しました。それは、ミニテストなどで答えが分からなかったら、正解の代わりに、例えば、"Out, out, brief candle!" (マクベス) あるいは "To be, or not to be? That is the question. Whether 'tis nobler in the mind to suffer." (ハムレット) さらに "Et tu, Brute?" (ジュリアス・シーザー) などなどを書けば、5点加点というお情けがあったからでもあります。半世紀がたった今でも、同級生たちとの年に一回の飲み会では、どこまで暗記しているかが話題になります。親友のT君は今でも上記のハムレットの第3独白をほとんど語んじることが出来ます。

上記の「ネットワーク・イングリッシュ」の授業ではNew York Timesの記事を頻繁に引用するのですが、適切な記事を探している際に "There's the rub" (NYTの記事検索で 3,550見つかります。シェークスピアの「ハムレット」の一節) という語句に出会うと、八木先生のお顔が目に見えます。学生諸君にしばしば翻訳ではなく原書を読むように勧めるのですが、その理由の1つは、日本語に翻訳した本は高価であるということです。もちろん翻訳の費用や日本では新本は値引きできないこともありますが、原書で読めれば安く早く（1年くらい）読めます。

10年前のことです。「情報商品」の授業でハリーポッター第5巻、「ハリー・ポッターと不死鳥の騎士団」（静山社）を例にしてamazon.co.jp経由の購入で、英語版なら税込み2,066円（前年予約特価 1,774円）日本語版では上下巻2冊セット（分売不可）価4,200円でした。（ゴメンなさい、翻訳者の邪魔をするつもりはありませんが）。シリーズ最後の「ハリー・ポッターと死の秘宝」については、どれほどの差があるか皆さんで調べてください。いろいろな翻訳本を原書と読み比べると、翻訳の技の見事さにしばしば脱帽させられます。でも翻訳のプロセスで消えてしまった微妙なニュアンスや、日本にはない慣習の表現に戸惑うこともあります。もちろん、私の語学力では読めない、理解できないことも少なくありません。特に文学作品ではよくあります。でも、何度も読み返しているうちにわかってくる（こともある）のは一種の達成感でもあります。今、世の中の「話せる外国語、使える外国語」というスローガンに抗するのは難しい状況ですが、ネイティブ・スピーカーでない多数の日本人のことを考えると、「単語を知らずに、読むこともできなくて、どうやって話せるの」と言いたいのですが、時代遅れでしょうか。



ハリー・ポッター英語版シリーズ
LLライブラリー所蔵（1号館地下1階）

(2013.11.02)

唐突だが、パンの実というものを食べたことがあるだろうか。

私が初めてパンの実を食べたのは、かれこれ10年近く前、カリブ海の島国ジャマイカでのことだった。その頃住んでいた家には広い庭があって、うれしいことにマンゴーやパパイア、オクラやアーモンドと、食べられる実になる植物ばかりたくさん植えられていた。食いしん坊の私は、植物図鑑で葉っぱや実の形を特定しては、片っ端から味見していったものだった。（よくぞお腹を壊さなかったものだ、と今でも思う。）パンの木は、母屋の裏手でヤツデに似た葉を茂らせている大きな木だった。発見したのはちょうど冬の頃、つまりパンの実の旬で、枝にはメロンほどの大きさの実がいくつもぶら下がっていた。当然、大喜びで実を収穫した私は、ものの本で調べた通り、200度のオーブンでローストすること30分。ほこほこ湯気の立つ白い果肉を切り分けて、一口食べた感想は「えっ、パンじゃない…！」



パンの実



マンゴー

めくるめく味覚体験を予期していた私には、なんとも肩すかしな味だった。一見、メロンに似た実だったので、何の根拠もなしに、メロンパンみたいにフカフカで甘いのでは、と予想していたのだ。ところが実際の味と食感とは、甘くないサツマイモ。塩を振れば普通に食べられるが、地味で、単調。南国のフルーツと言えば、マンゴーやパパイア、ドリアンやグアバのように、華やかで濃厚な味わいを想像するだろう。そんなきらびやかな期待を見事に裏切る、淡泊でモソモソとした味だった。マンゴーなら東京の大概のスーパーで売っているのに、パンの実がないのはなるほどそのためか、と妙に納得したものだ。

その後調べてみると、ジャマイカ料理の中でパンの実は、お米やヤムイモ、料理用バナナ（加熱しないと食べられない、甘くないバナナ）と並んで、主食的な扱いをされていることが分かった。ああ、あわててパンの実をオーブンに放り込まないで、ちゃんとメインディッシュを用意すればよかった、とジャマイカ料理の本を前に反省したものだ。とはいえ未知の食べ物はすぐに試食してみないと気が済まない性分なので、あれからも懲りずに同じような行動を繰り返しているのだが。そのような、ある意味印象的な出会いを果たしたパンの実だが、少し見方を変えると、その味わいは何とも甘くも苦くもなる。お砂糖を作る黒人奴隷のご飯だったからだ。

ジャマイカと言えば、今はレゲエ音楽やボルトのような陸上選手の生まれ故郷として知られているが、実は立憲君主制の国で、国家元首たるジャマイカ国王をつとめているのが、イギリスのエリザベス女王だということを知っている人は少ないだろう。1962年にジャマイカが独立するまで、300年近くこの島国はイギリスの植民地だった。その名残りのなだ。ジャマイカの公用語が英語なのも、自動車がイギリスと同じように道路の左側を走るのも、イギリスとの長い長い付き合いがあるからである。そして、キングストンの町のおちこちに、パンの木が当たり前に生えているのも。

南太平洋のポリネシアからパンの木がジャマイカに持ち込まれたのは、18世紀の終わり。その頃、ジャマイカを含む西インド諸島の植民地は、お砂糖の一大生産地として、イギリスにはなくてはならない存在だった。イギリス人がこよなく愛する午後の紅茶の時間も、お砂糖や甘いお菓子がないと、何とも味気ないものになってしまう。朝、トーストに塗るジャムや、夕食後のプディングも忘れてはいけない。だからジャマイカの平地は開墾されてサトウキビのプランテーションに代わり、アフリカから黒人奴隷が何千人何万人と連れてこられて、そこで働かされるようになった。そして奴隷用の安上がりな食べ物として、イギリス人はパンの木を持ち込んだ。



コーヒーの花

当初パンの実は不評で、奴隷たちにはそっぽを向かれたそう。けれどいつしか受け入れられて、今ではジャマイカの食卓の定番になっている。そんなパンの実の美味しい食べ方だが、「プランテーション定食・労働者風」と私が勝手に呼んでいるものがおすすだ。アキーという茹で卵の黄身に味も見た目もそっくりな果実を、塩漬けの鰯と炒め合わせた、なんちゃってスクランブルエッグ（アキー・アンド・ソルトフィッシュと呼ばれるジャマイカの定番料理）を、オープンでじっくりローストしたパンの実に添えたものだ。ちなみに塩漬けの鰯も、奴隷用のタンパク源としてイギリス人がジャマイカに持ち込んだものである。

驚くべきことに、東京ではパンの実もアキーの水煮缶も、そして当然塩漬もちゃんと手に入る。だからもし良ければ、一度、パンの実定食を作ってみてはいかがだろう。イギリス風の優雅なティータイムも良いものだが、こんなご飯を味わっているのもまた、英語が話される世界の陰影を舌から実感できて、一興だと思うのだが。

All Photographs: Copyright(C) 2013 Ayako Sakurai



コーヒーの実

(2013.10.01)

【第40回】 Social Media Language Learning

文学部准教授 ロンコーブ, ピーター D. (英語担当)

Trying to learn another language can often be difficult when you do not live in a place where that language is spoken. On the one hand, you rarely have an opportunity to meet people who speak the language that you are trying to learn. On the other hand, even when you do meet someone, you may not be able to build up enough courage to speak to them because you're worried that you may embarrass yourself by making a simple mistake, or that you may not be able to understand the other person.

As a language teacher, though, I've noticed that getting an opportunity to use the language that you are learning has become much easier with the rising popularity of social media. With social media sites like Facebook, Twitter, tumblr, and others like them, it has become much easier to find ways to use the languages that you are trying to learn.



For example, people who want to learn English can search for Twitter groups that are devoted to English language learning and follow them.*1 Or people wanting to learn German can search on Facebook for pages that have been created for people trying to learn German.*2 In doing this, learners can find a place where they can participate in real interactions in the languages they are trying to learn with people who either speak the language or are also trying to learn the language. Doing this allows them to use the language meaningfully without needing to worry about embarrassing themselves. What's more, it gives learners an opportunity to meet people from many different places. So they can find out about different cultural events and practices from all over the world while also practicing using the language that they are working hard to learn.

Finally, instead of just looking for pages devoted to studying the languages they want to study, learners can instead search for things they are interested in, using the languages they are trying to learn. So if a someone learning French is interested in movies, that person might go to Facebook and type in "j'aime cinéma" (I love movies) in the search box. Finding a page in French devoted to movies would allow this person to interact with other French speakers/learners in French about their own interests.*3

Link

*1. http://twitter.com/englishE_L_L

*2. <http://www.facebook.com/germanlanguagelearning>

*3. <http://www.facebook.com/jaime.lecinematino>

(2013.07.04)

中学時代、英語の授業が嫌いだった。嫌いな理由は、やるのが幼稚だからである。「これはペンです」と皆で声を揃えて発音するなんて実にくだらない。大体、「これはペンです」などと日常生活で言う場面は想定できない。そんなことをする時間があったら、日本語の本を沢山読んで、世界の歴史や文化（自分がまだ知らないこと）を学ぶほうがずっと役に立つ、と思っていた。

高校時代、もうちょっとまじな外国語はないか、と思いドイツ語部に入った。しかし入部直後に虫垂炎をこじらせて腹膜炎を併発、長期入院を余儀なくされて、ドイツ語どころではなくなった。退院、復学後は、皆に追いつくために学業に精を出したけれど、相変わらず英語の授業だけは嫌いだった。テキストの内容が他科目に比べて、浅薄だと感じた。とはいえ、「知らないことを知りたい」という気持ちは人一倍強く、交換留学制度に応募、米国西海岸サンディエゴへ留学した。この時、英語の日常会話は、ちゃんと耳を澄まして聴きとり、前後の状況や相手の態度から内容を想像すれば、「わかる」ことを発見した。この経験から、英語なんて学校で特別の勉強をする必要性はないのだ、とも確信した。帰国後、この「わかる感」を失いたくなくて、神保町にあるトマス会話学院で個人レッスンを受け始めた。講師はジョン・スミスという冗談のような名前の米国人だったが、彼の落ち着いた話し方が気に入って、レッスンは大学入学後も続けた。（スミスが帰国し、講師がへんてこなヒッピーに交代した瞬間、止めた。）ちなみに、受験英語を勉強する気はなかったので、推薦入試制度で大学に進学した。面接の時、ドイツ語で質問されたのを覚えている。

大学時代の専攻は法律だったから、英語の勉強は最小限ですんだ。しかも、英語の授業を担当するのはネイティブの神父様で、TV番組を使ったコミュニケーション的なものだったから楽勝だった。「声が綺麗だ」という理由で、神父様が制作する英語教材のアフレコも頼まれた。日本人が会話する場面で私が英語に吹き替えた。「英語嫌いで全く勉強していない私」が話す教材で勉強した人があることになる。それを思うと不思議な気分だ。

しかし、大学時代も「知らないことを知りたい」という気持ちが度々抑えきれなくなり、カナダに留学したり、ドイツ語（第2外国語）に加えイタリア語（第3外国語）を学んだりした。イタリア語は3年間で上級レベルにまで行ったから、私が学習した時間が最も長い言語である。卒業後も日伊協会のイタリア語講座に通った。ただ、この頃から私の英語に対する気持ちが少し変わってくる。多少なりとも興味が湧いてきたのだ。カナダではフランス語圏のモントリオールに滞在していたから、英語を断固拒否する人々の存在を知り爽快だった。また、ゲルマン語であるドイツ語とローマン語であるイタリア語を学んでいると英語という言語が複合言語であることがよくわかる。それがどのように解説されているのか、急に知りたくなって分厚い文法書を購入して独習した。

さらに、就職した防衛庁（当時）は、同盟国（米国）の言語から逃れられない組織だったから、任務遂行のために、私は庁内のPXで買った米軍用語集で、略語を中心とした専門用語を覚え、日々の仕事を通じて知った特別な表現や用例の資料を独自に作成して覚えた。最も英語漬けになったのは国際室の渉外専門官をしていた頃で、在日米軍のみならず、諸外国大使館の武官達と英語で格闘した。とはいえ、より重要なのは仕事（交渉）の中身であって、英語そのものではない。当時国防長官だったディック・チェイニー（後にジョージ・W・ブッシュ政権で副大統領）の訪日時には度々通訳を担当、夫妻の京都旅行にも随行したが、竜安寺の石庭で、禅について、夫妻に英語で説明するはめになったのにはまいった。重要なのは英語そのものではなく、やはり内容であった。

1991年の湾岸戦争後、過労で倒れ、ひとり入院していると、自分の無力さを痛感し、もっともっと「知らないことを知らねばならない」という気持ちになった。そこで退院後は、仕事の合間に大学院（夜間部）に通い、国際政治を専攻、それを奇貨として研究所勤務に転じた。主たる仕事は調査・研究であり、年に数本のレポートや論文を書く。しかし、研究所では論文を所外に発表する際、煩雑な手続きがあり、時にはその過程で上司からの外れな修正を求められる。私はこの「いちゃもん」が不快だった。これから逃れるには、日本語ではなく英語で論文を書くのが手取り早い。敵もそこまでは追ってこないからである。その結果、期せずして英文の研究業績が増えていった。

専修大学に教養英語担当教員として奉職できたのは、一にこれら英文業績によるものである。

私は英語が嫌いだった。

今でもそんなに好きではない。



「チェイニー夫妻と竜安寺にて」

ロシア語はインド・ヨーロッパ語族の中のスラヴ語派に属する言語で、スラヴ語派はさらに東スラヴ語群、西スラヴ語群、南スラヴ語群の三つのグループに別れ、そのうちロシア語は東スラヴ語群に属します。

元々一つであったスラヴ語が分化したのは1000年頃のことです。個々のスラヴ語が別個の言語として独自の発達を遂げたのは過去千年くらいのことにはすぎません。したがって、スラヴ諸語は互いに近い言葉であり、特に、東・西・南それぞれのスラヴ語群内の言葉は近い親戚のような関係にあります。ですから、少し誇張して言えば、東スラヴ語群、西スラヴ語群、南スラヴ語群の三つの語群の中からそれぞれ一つの言葉を習得すれば、すべてのスラヴ語をある程度理解できるようになることも、夢ではありません。

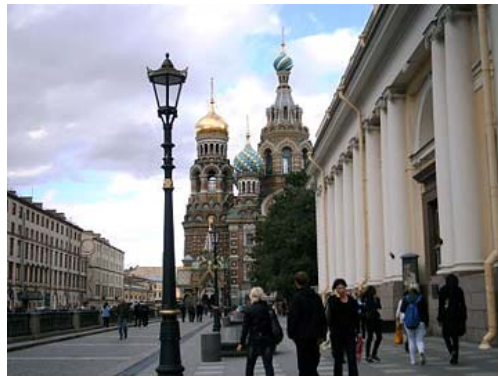
私自身の経験で言えば、私はスラヴ諸語のうち、ふだん自分の研究に使い、読み書き話することができるのはチェコ語とロシア語なのですが、チェコ語と同じ西スラヴ語群に属するスロヴァキア語は、聞いてもかなり分かるので、チェコ人だけでなくスロヴァキア人も話ができます。そのほかにも、同じ西スラヴ語群に属するポーランド語やソルブ語も、ある程度分かります。

また、東スラヴ語群に属するロシア語について言えば、同じ東スラヴ語群に属するウクライナ語とベラルーシ語もロシア語に近いですし、それだけでなくウクライナとベラルーシはかつてロシアと共にソ連を構成していたなどの歴史的事情から、実はウクライナ人とベラルーシ人でロシア語を第一言語とする人々が非常に多いのです。そのため、私はウクライナ人やベラルーシ人の知り合いとも、ふつうにロシア語で話したりメールをやりとりしています。

南スラヴ語群について言えば、私はスロヴェニア語を一応かじりましたが、ふだん使わないため、チェコ語やロシア語のように読み書き話すことはできません。これはちょっと私にとって残念なことで、もっと時間ができたら、いつかきちんとスロヴェニア語をマスターして、南スラヴの人たちとも交流できるようになりたいと思っています。もっとも、意外なことにスロヴェニア語は結構チェコ語と似ているので、南スラヴ語も多少は理解できます。



ブラハ



サンクト・ペテルブルグ

このように、どれか一つのスラヴ語をマスターすると、世界は一気に広がります。ご存知のようにロシアは世界最大の国ですし、さらにスラヴ圏となると、中・東欧・ロシア・バルカンと、ユーラシア大陸の非常に広い範囲に及び、そのスラヴ圏では16ものスラヴ語が用いられているのです。そこで水を得た魚のように言葉が分かったら、どんなに楽しいでしょうか！

チェコのブラハ、ロシアのサンクト・ペテルブルグなど、スラヴ圏には世界有数の美しい町もあります。私はかつて学生時代にブラハに留学していた時、ブラハっ子の美人学生に美しいブラハの町をあちこち案内してもらい、チェコ語でいろいろと説明してもらいました。その後、サンクト・ペテルブルグに行った時も、やはりサンクト・ペテルブルグっ子の美人学生に、美しいサンクト・ペテルブルグの町をあちこち案内してもらい、ロシア語でいろいろと説明してもらいました。それはとても素敵な思い出になっています。

どうです？ 皆さんも、ロシア語、あるいは何かスラヴ語に挑戦してみませんか？

なお最近、「専修大学ロシア語のページ」を開設しました（<http://senshurussian.jimdo.com/>）。そこには、毎回の授業進度（授業を欠席した学生のため）、役に立つロシア関係WEBサイトの紹介、補助教材ダウンロード、東スラヴ語圏ヴァーチャル・ツアーなど、盛りだくさんの内容をアップしています。専修大学でロシア語を学ぶ人も、これからロシア語を学ぼうと思う人も、是非利用してください。

しばらく前に、Facebookにこんな投稿をした。

遠い昔、小学生の頃、研究のため渡米した親の後から私も渡米。英語なんてひとこともわからないまま地元の小学校に入った。当時（1960年代末）東洋人は珍しかったようで、みんな寄ってたかって親切にしてくれた。

ターニャ(Tonje)というノルウェー人の女の子がいて、私より先に米国に来てもう英語が上手になっていた。まだ英語ができない私を過去の自分に重ねてか、一生懸命英語を教えてください親切にしてくれた。ウェーブのかかった茶色の長い髪の彼女に、まだ子どもの私は自然と好意を抱いた。

しかし気に入った子にかえって意地悪をしたり嫌がるような言動をしてしまうという、それぐらいの年（小学4年生）の男の子にありがちな態度を取ってしまい、ものの見事に嫌われた。

日本に帰国するとき、クラスみんなが集まってきて、「ほんとに帰っちゃうの？」と別れを惜しんでくれたのに、ターニャだけは遠くでそっぽを向いて、「ふん、Hiroshiなんかとずっと帰ればいいんだわ」という顔をしていた。あれから40年余り。ふとGoogleしてみたら、ノルウェーの病院のサイトに、女医さんになっているターニャの写真があった。ちょっとお年を召した感じはあるけれど、面影のある懐かしい顔。なんとメールアドレスもちゃんと載っているのだけど、思い出は思い出にしておくのがいいのだろうな…

これはもう40年以上前の話。その後大学・大学院で言語学を学んだ私は、2009年から2010年にかけて、専修大学から長期在外研究を認められ、米国東海岸のボストン近郊で1年間を過ごした。行った先は私の父と同じHarvard大学言語学科、つまり親子二代続けてHarvard大学の客員研究員となった。私の子どもが小学5年生のときで、私が親の後について米国に行ったのが小学4年生のときだったから、40年の年月を経て、ほとんど同じ人生的一幕を再現したことになる。

私の子どもも、40年前の私と同様、現地で公立小学校に通った。自然と英語もかなりできるようになり、人前で自分が考えたプロジェクトについて英語で説明できるまでになった。40年前の私より大人で、好意を抱いた子に無意味な意地悪をするようなバカなことはしなかった。帰国するときは、友人たちから特製の「お別れ記念アルバム」をプレゼントされ、最後の日のためにわざわざみんなで考え、練習した「お別れ記念演劇」まで上演してもらったそうだ。

さて、私の話に戻る。Facebookの私の投稿に対して、「それはぜひ連絡を取ってみるべき！」というFacebookフレンドからのコメントがたくさん寄せられた。その声に背中を押され、ターニャ宛に送った私のメールを、恥をしのいでここに再現する。

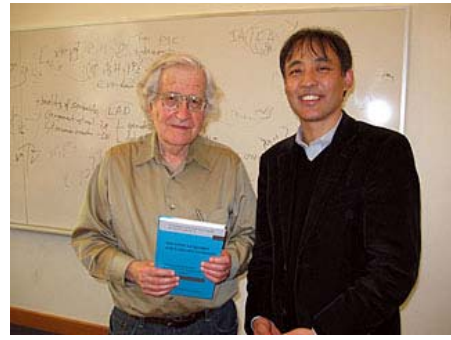
Dear Tonje,

I hope you don't mind my sending you this e-mail message out of the blue. I was a Japanese boy who went to Agassiz School in Cambridge, Massachusetts (3rd and 4th grade) around 1969-1970. I hope you remember me.

I still remember my childhood days in Cambridge once in a while. I felt nostalgic when I remembered about you, and tried some Googling. I found your photo and your e-mail address at a hospital website in Norway. It seems that you have become a doctor! I remember you as being smart and as a girl getting good grades, so it doesn't quite come as a surprise!

I also remember you as being very nice and kind and helpful to me, when I first visited the States and did not understand a word of English. I still remember a scene in the Agassiz schoolyard, where you put a long stick and a short stick on the ground and told me, "Pick up the long stick." I did, and you cheered me, "Very good, Hiroshi!"

As a result of your being nice and kind to me (and also of your being pretty!), I remember



2009年4月、MIT（マサチューセッツ工科大学）のノーム・チョムスキー（Noam Chomsky）教授の講義後、ヨーロッパで出版された私の共編著書を贈呈



2009年11月、Harvard大Huang教授のご自宅でのThanksgiving（感謝祭）のパーティにて。Huang教授は台湾人なので、彼を頼ってやってくるアジア各国からの留学生や研究者が多い。



筆者の子どもが2010年春に米国から帰国する際、小学校の友人たちが製作し贈ってくれた「特製お別れ記念アルバム」

developing a fond feelings toward you. But the problem with a boy of that age is that he often expresses his fond feelings in exactly the wrong way. I think I said and did some nasty things to you, and as a result it seemed to me like you developed a dislike for me.

I remember the day when I was leaving Agassiz; everybody gathered around me to tell me that they were going to miss me, except for you who stayed away from the crowd. (I felt a bit sad deep down inside!)

I studied linguistics in college and at graduate school, and now I am a university professor in Tokyo. I presented a paper at the University of Tromsø in Norway in 2007 (It was such a long way from Japan!), and I was a visiting scholar at Harvard (just like my father was 40 years ago!) in 2009 - 2010.

I would be delighted if I could hear from you; if you could tell me about your life after your childhood days in Cambridge. I am sincerely hoping that you will read this message from me, and that I will hear from you before long!

With warmest regards,
Hiroshi Hasegawa
Professor, Senshu University

残念ながら、ターニャからの返事は来なかった…

(2013.04.01)



専修大学LL研究室 (<http://www.senshu-u.ac.jp/libif/lld/>)
〒214-8580 神奈川県川崎市多摩区東三田2-1-1
TEL:044-911-0502 FAX:044-900-7842

[HOME](#) | [プライバシーポリシー](#)

Copyright(C) 2000-2014 Senshu University All Rights Reserved.